

巻頭言

大分県赤十字血液センター 金田幸司

2023年11月26日に大分県別府市で第55回九州人工透析研究会を柴田洋孝大会長の下、副会長の私を含めて大分大学腎臓内科全員で準備・開催させていただきました。コロナ禍後の初の完全対面での開催であり当初は参加人数に不安がありましたが会員の皆様のご協力のお陰で九州・沖縄各県から約1000名の参加者があり盛況な会にいただきました。

今回のテーマ「腎生100年時代の透析医療」ということでシンポジウムには「超高齢化時代の透析医療」を選びました。透析導入患者の高齢化に伴って、導入時期に既にADL低下、認知症の進行、多くの合併症を持った患者が増え、更に家族の考え方も多様化し、医療・介護を全て医療側に依存する症例も多く、透析導入時SDMが難しい患者が増えてきていると感じています。今回4人の先生方に導入施設、維持透析施設、腎臓内科医、血管外科医の立場からそれぞれ発表いただき、保存的腎臓療法（CKM）が提唱されている中での透析医療の問題点を討議いただきました。またシンポジウムの最後には透析の草創期から現在まで透析医療を引っ張ってこられた九州人工透析研究会名誉会長の藤見惺先生からコメントをいただきました。

透析の導入や継続にはガイドラインでのはっきりした線引きは難しく、最終的には透析医療にかかわる我々医療者の患者への向き合い方（医の心は人の心）に帰結することを再確認しました。

特別講演で日本腎臓病協会理事長の柏原直樹先生に「国策としてのCKD対策」でご講演いただいたようにSGLT2阻害薬やMRAを含めた腎臓病治療薬が使用可能になり透析導入患者数もやっと減少傾向になった現在ではありますが、同時に進行している超高齢化時代に伴い、私が腎臓内科医を始めた40年前の合併症の少ない慢性腎炎による外来透析中心の医療から、糖尿病・高血圧を基礎とする介護を要する患者群に大きく変化し、介護資源を使った血液透析や腹膜透析の整備も必要に迫られていると実感しています。

研修医時代に透析患者を診ることは全身を診ることで当時の福岡赤十字病院藤見副院長に教わり、諸先輩から透析導入期の患者や家族への説明（今でいうSDMを含めて）が一番難しいと指導された腎臓・透析医の診療は現在、更に難しくなったと考えます。

透析医療は医学知識や技術だけでなく心も磨き続ける分野だと思います。

個人的には55回を迎えるこの会を初めて大分の腎臓内科主幹で開催できたことは大変な喜びでした。大分県は腎臓内科が泌尿器外科と一緒に腎臓・透析医療を行っています。その中で大分大学の腎臓内科も40名を超える所帯となり県内の基幹病院のほぼ全てに腎臓内科医が派遣され透析医療を行っています。今回の研究会でその一端が披露できたのなら幸いです。今後も他県に遅れを取らないように腎臓・透析医療の心と技の修練を続けていきたいと考えます。

本会が更に発展していくことを願っております。